

# テーマセッション「社会教育」

安藤享平（郡山市ふれあい科学館）

中道晶香（県立ぐんま天文台）

## On the Social Education Session

Kyohei Ando (Koriyama City FUREAI Science Center)

Akika Nakamichi (Gunma Astronomical Observatory)

### 1. 趣旨

「学校教育」がすべての人々に対して等しく与えられるべきものであるのに対して、「社会教育」は人々が自発的に求めていくものである。そこには必然的に「教育」とは異なる目的や役割がある。「社会教育」がもっている目的や役割とは何かに焦点をあて、社会のブームや施設の予算に踊らされない「社会教育」のあり方を考える。（年会プログラムより）

今回のメインテーマに沿って振り返ると、天文教育における社会教育分野も、現在大きな節目の時期を迎えていると言えます。「理科離れ」に留まらず、幅広い年代での「学び」に対する意識の変化や、行財政改革の流れにより公共天文施設の厳しい状況を迎えている中で、どのような将来像を描いていくかを、基調講演と討論により追究しました。

### 2. 基調講演

セッションにあたり、まず次の方々に基調講演を行っていただきました。

- ・ 黒田武彦氏（西はりま天文台）  
「社会教育は生涯の学習テーマ、生涯学習は社会の教育テーマ」
- ・ 伊東昌市氏（杉並区立科学館）  
「プラネタリウムの変遷 日本プラネタリウム、昨日、今日、明日」
- ・ 伊藤哲也氏（国立天文台）  
「科学ライブショー“ユニバース”その10年の歩みと今後の展望」

黒田さんからは社会教育を取り巻く現状を、各審議会の答申内容や各調査のデータを踏まえて指摘いただくとともに、天文教育施設全般の現状・将来像についてお話いただきました。伊東さんからは、プラネタリウムの歴史的な流れを詳細に紹介いただき、これからのプラネタリウムが進むであろう方向を、悲観的／楽観的な姿に分けてお話くださいました。伊藤さんは社会教育施設における天文教育の新たな試みとして始めた「ユニバース」の着眼点とこれからの展望をご紹介いただきました。（なお、基調講演の詳しい内容は、各ページをご覧ください）

### 3. 討論

討論においては、さまざまな観点からの指摘と議論が続きました。

- ・ 社会教育施設の利用者として子ども・高齢者が多いが、中間の層に対してどのようなアプロ

一歩をしていくか？

- ・ 社会教育施設は“面白くない所をいかに面白くするか？！”を考慮した展開を行うべき。
- ・ 利用者の観点からすると、いつも同じ展示など科学館に変化が無いと、自分で何回も行く気になれない
- ・ このままでは娯楽施設になる危険性がある一方、市民のニーズに対していかに応えていくべきか？
  - \* ニーズの質を転換させていく方向に向けることも必要
    - ・ 知ることに対して喜びの持てるような国民性を育てる
    - ・ 社会教育施設の利用が生活の一部となるような文化を育てるための活動を目指すべき。
- ・ “体験”した小学生と、していない小学生との間には大きな差があるから、社会教育施設における“ほんもの体験”の機会提供が大切である。
- ・ 学校教育との連携をどうするか？
  - ・ 小学校の現場では、児童を連れて行くのは大変。行くためには、1日かけて何人かの先生と連れて行かなければならないので、時間が無い。
- ・ 年代別の基本的な学習のレベル、スタンスについても考慮が必要ではないか。現在の青少年に対しては、「学習すること」へモチベーションを高める工夫が不可欠である。
- ・ 若い人（社会教育施設になかなか足を運ばないとされる「中間の層」）はカッコイイ人に憧れるので、社会教育施設では学習する・見せることに対して“カッコ良さ”を追求するべきではないか。
  - ・ ただし本質との兼ね合いは見失わない。
  - ・ 人を見せる・モノを見せる、この見せ方の検討を突き詰めていくべき。

#### 4. 最後に

人々の生活スタイルや娯楽が多様化し、また内部でも効率化や集客という数字に一喜一憂せざるを得ない状況を迎え、社会教育施設も周囲と対抗して人を惹きつける（/集める）為の「面白さの追求」があります。その中で、いかに本質を見失わずに活動を展開していくかを常に意識しなければならないことを、今回のセッションにおいて再認識できたと思います。

社会教育施設（とその職員）には、虚飾や見せかけではない“本物”の提供と、自発的に追求することをサポートし、また追求したくなるような「仕掛け」のできる、よい“料理人”としての腕が求められています。

今後も幅広い年齢層へのアプローチの方法を探り、社会教育施設での「見せ方」の検討を詰め、究極の目標である「国民性・文化を育てること」の拠点となるよう、理念を持った取り組みを進めていくとともに、研究会で引き続き新たな時代に向けた取り組みへの情報交換と議論・幅広い分野との連携した活動が展開できればと思います。